

(仮称)富山西インターチェンジ関連
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

境野新遺跡・向野池遺跡

2000年

富山市教育委員会
富山市埋蔵文化財調査委員会

(仮称) 富山西インターチェンジ関連
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

境野新遺跡・向野池遺跡

2000年

富山市教育委員会
富山市埋蔵文化財調査委員会

例 言

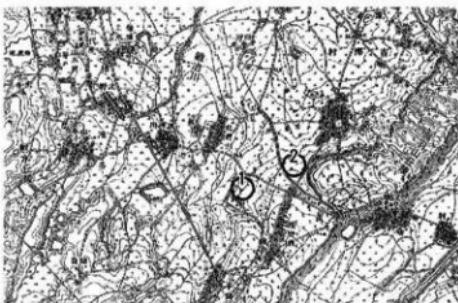
- 1 本書は、市道（富山西インターチェンジ側道）拡幅及び新設工事にかかる富山市境野新遺跡及び向野池遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山市商工労働部の依頼を受けて、富山市教育委員会の設置した富山市埋蔵文化財調査委員会（委員長 前田英雄）が受託して実施した。調査主体は富山市教育委員会である。
- 3 調査期間、調査面積、担当は次のとおりである。

境野新遺跡	平成11年11月15日～平成11年12月28日	50 m ²
向野池遺跡	平成11年11月16日～平成12年1月28日	145 m ²
- 4 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター 学芸員 鹿島昌也が担当し、同学芸員 近藤顯子が補佐した。本報告の執筆・編集は鹿島が行った。なお、附録については、富山県埋蔵文化財センターの高橋真寛氏に玉稿を賜った。
- 5 出土品の図化作業は、廣瀬直樹（富山大学学生）、鹿島が行った。なお、石器の観察については本巻主任学芸員 古川知明の助言を得た。
- 6 調査から報告書作成までの間に次の機関・各氏から有益な助言を頂いた。記して謝意を表したい。
富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、西井龍儀、橋本正春、麻柄一志、宮田進一、山本正敏（敬称略）
- 7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
 - (2) 座標は国家座標を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
 - (3) 造構の表記は次の記号を用いた。

SD	: 溝	SK	: 土坑	P	: ピット	SX	: 不明造構
----	-----	----	------	---	-------	----	--------
- 8 出土品及び原図、写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 9 境野新遺跡の自然科学的分析は、パリノサーヴェイ株式会社が行いその報告を第IV章に収録した。また、向野池遺跡出土の黒曜石の産地推定を沼津高等専門学校の望月明彦氏にお願いし、その結果を第V章に収録した。

目 次

I 位置と環境	1	写真図版	17
II 調査に至る経緯	2	報告書抄録	24
III 発掘調査の概要	3		
1. 境野新遺跡			
(1) 試掘確認調査の経過と結果			
(2) 発掘調査の経過と方法			
(3) 基本層序			
(4) 造構			
(5) 遺物			
(6) 小結			
2. 向野池遺跡			
(1) 試掘調査の経過と結果			
(2) 基本層序			
(3) 造構			
(4) 遺物			
(5) 小結			
附録 向野池遺跡採集の細石刃核			
IV 境野新遺跡の自然科学分析	13		
V 向野池遺跡出土黒曜石産地推定結果	16		



第1図 明治43年陸地測量部迅速図 (1 : 40,000)

1. 境野新 2. 向野池

I 位置と環境

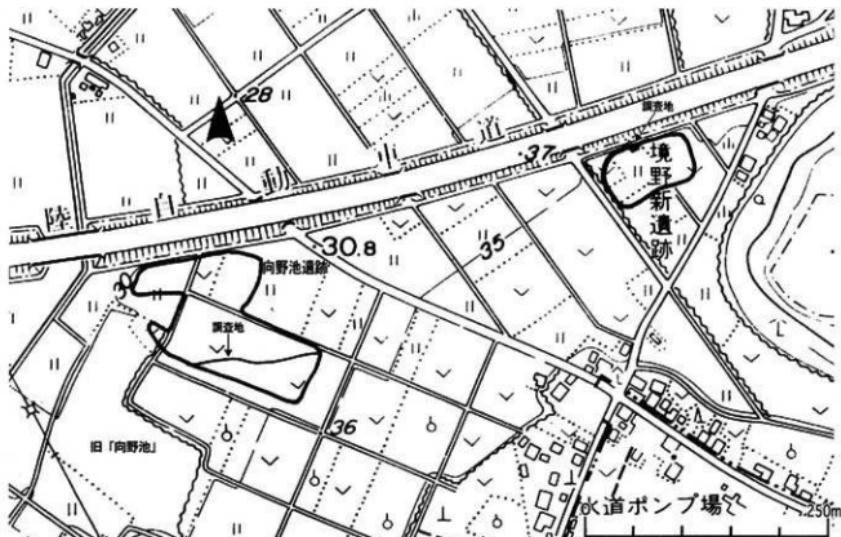
境野新遺跡と向野池遺跡は、富山県を呉東と呉西に二分する呉羽山丘陵の南西端に位置する。両遺跡の立地する付近は境野新扇状地と呼ばれ、東側の呉羽山丘陵と西側の射水丘陵に囲まれ、境野新付近を扇頂とし、北に約60度の角度で開いた開析扇状地である。

両遺跡は、いずれも富山市境野新地内にあり、南東から北西方向へ延びる県道宮ヶ谷・総野線をはさんで東側に境野新遺跡があり、西側に向野池遺跡が位置する。両遺跡間の距離は、直線で約0.5kmを測る。

境野新遺跡は、標高約34mを測り、遺跡に北接して北陸自動車道が走っている。昭和47(1972)年に農業改善事業工事中、古墳時代(5世紀)の2重に周溝をめぐらす隅丸方形の竪穴住居跡2棟が発掘された。その竪穴住居跡は、古沢用水土地改良区と富山市教育委員会との協議の上、盛土保存し、輪郭や柱穴・周溝などが分かるよう整備されている。遺跡からは、旧石器時代の遺物(石刃、搔器、石核など)や奈良・平安時代の遺物も見つかっている。

今回発掘調査を行った場所は、盛土保存がなされた地区の北西部に隣接し、X75196～75204、Y-2571～-2585に囲まれた区域に該当する。

現在、遺跡周辺はほ場整備がなされ、北の丘陵から南の射水平野方向へ緩やかに下る地形を呈している。旧地形を見ると、遺跡の東側に比高差約2m、幅10m前後の、湿地帯が蛇行して南北に走っており、遺跡は微高地に立地するような状況を呈している。



第2図 境野新遺跡・向野池遺跡発掘調査区位置図 (1:5,000)

向野池遺跡は、境野新遺跡と浅い谷地形を挟んだ南南西に位置し、標高約32mを測る。遺跡の南西には灌漑用ため池「向野池」がかつて存在していた。この池の東側を流れる用水と土手を修築中に、池の縁や土手から旧石器時代の遺物（ナイフ形石器、石核、剥片など）が表採された。合わせて、池の東側からは、縄文時代早期～奈良・平安時代にかけての遺物が分布している。

今回発掘調査を行った場所は、平成7年度に試掘調査が行われ、遺跡が確認された範囲の南西部に位置する。旧向野池東側の微高地上、X74969～74986、Y-2903～-3041に囲まれた範囲にあたる。

II 調査に至る経緯

1 経緯

平成6年度に、富山市は呉羽南部地区周辺開発と、（仮称）富山西インターチェンジ建設の計画を明らかにした。計画では、インターチェンジ（以後ICと略す）ランプ建設のほか、接続する主要地方道新湊平岡線の新設、市道杉谷平岡線拡幅、市道（IC側道）新設、企業団地造成計画などの周辺開発が含まれている。

開発予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地8箇所が所在している。土地利用構想の中で、これらの埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、「地域の整備・開発を検討するにあたっては、地域の特性や歴史遺産の保存の上からも、また、調査・保全に要する費用・時間を考慮して、開発の検討区域からも除外もしくは、緑地・公園などの環境保全のための用地として取りこむことを原則条件とする」と提言している。

これを受けて、富山市商工労働部企業立地推進室と富山市教育委員会は、平成7年度から試掘確認調査を順次進めることで調整を図った。試掘確認調査は平成9年度まで行い、第1表に掲げる結果となった。

この結果に基づき、確認された埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公团北陸支社富山工事事務所および富山市商工労働部企業立地推進室、富山市教育委員会の3者間で協議を行い、次のとおり方針を定めた。

- ICランプ、道路敷地、掘削工事等を伴う施設建設、工作物、その他掘削が埋蔵文化財包蔵地に及ぶ場合は発掘調査を行う。
- 緑地、道路構造令に基づかない市道は盛土保存とする。
なお、発掘経費については、次のとおり工事施工を担当する部局が負担する。
- ICランプ、料金所 …日本道路公团
- 主要地方道新湊平岡線…富山県土木部
- 周辺市道（IC側道含む）…富山市商工労働部企業立地推進室

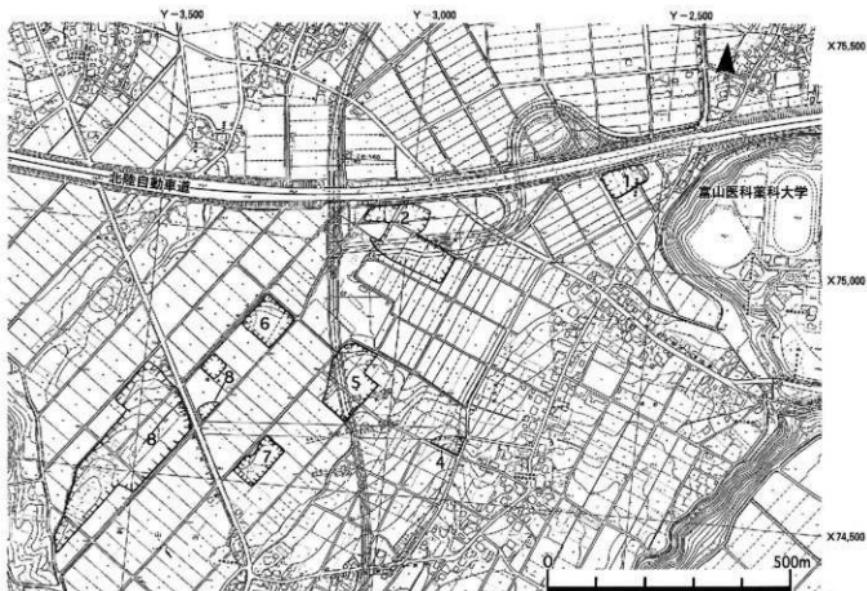
この協議に基づき、周辺市道の内、ICランプに並走する市道（IC側道）について、平成11年度工事にかかる境野新遺跡の試掘確認調査および発掘調査、向野池遺跡の発掘調査を実施した。

1) 境野新遺跡

境野新遺跡は、市道（IC側道）拡幅工事に伴う掘削部分について、295m²の現況水田部を対象に、遺跡の所在を確認する試掘調査を実施した。引き続き、遺跡が所在し工事掘削にかかる約50mについて発掘調査を実施した。

2) 向野池遺跡

向野池遺跡は、ICランプに並走する市道（IC側道）側溝埋設工事に伴い、掘削工事が行われる幅約1m、延長約145mについて、発掘調査を実施することになった。



第3図 (仮称) 富山西IC及び周辺開発にかかる埋蔵文化財所在位置図 (1:10,000)

No.	遺跡名	試掘対象面積 遺跡確定面積	主な時代と遺跡の概要	工事計画 (遺跡にかかる面積)	今回発掘調査対象面積
1	境野新	294 m ² (今回) 50 m ² (今回)	縄文・古墳時代の集落	市道 (IC側道) 拡幅 (50 m ²)	50 m ² (市道)
2	向野池	17,325 m ² 21,000 m ²	平安時代の集落	ICランプ・料金所・県道 ・市道 (16,500 m ²)	145 m ² (市道側溝)
3	境野新南I	1,392 m ² 0 m ²	(遺跡なし)	市道杉谷平岡線拡幅 (なし)	—
4	境野新南II	3,384 m ² 1,000 m ²	縄文時代遺物包含層を 確認	市道杉谷平岡線拡幅 (230 m ²)	
5	北押川C	3,073 m ² 12,000 m ²	縄文時代前期の集落	主要地方道新湊平岡線新設 (3,650 m ²)	
6	北押川B	4,544 m ² 4,544 m ²	縄文時代の集落 平安時代の生産遺跡	周辺開発 (4,544 m ²)	
7	池多東	6,035 m ² 4,800 m ²	奈良～平安時代の生産 遺跡 (製鉄・炭窯)	周辺開発 (4,800 m ²)	
8	御坊山	46,000 m ² 39,700 m ²	奈良～平安時代の生産 遺跡 (製鉄・炭窯)	周辺開発 (39,700 m ²)	

第1表 (仮称) 富山西IC及び周辺開発にかかる埋蔵文化財一覧

III 発掘調査の概要

1 境野新遺跡

(1) 試掘確認調査の経過と結果

平成11年11月15日～16日にかけて、水田部約295m²を対象に3本のトレンチを設定し、バックホウによる掘削を行い遺構・遺物の有無を確認した。最も東寄りに設定したトレンチ東寄りの地表下約65cm～85cmに、黒色土の遺物包含層を確認した。遺物包含層中からは、旧石器時代の遺物や縄文時代の土器、石錘、剥片などが出土した。(第5図) その下の黄色地山面に南北方向の溝跡1本を検出した。

以上の結果、工事対象範囲の内約50m²に遺跡の所在を確認したため、その50m²を対象に発掘調査を実施した。

(2) 発掘調査の経過と方法

平成11年11月22日に遺物包含層の所在する50m²について表土掘削を行った。12月8日から作業員による包含層発掘・遺構検出作業を着手した。検出した各遺構の位置を概略図に記録し、遺構掘削、上層断面実測、出土遺物実測、写真撮影などの記録作業を行い、出土遺物は番号を付けて取り上げた。遺構の図化・出土遺物実測に付いては、測量機器(トータルステーション)による測量作業を行った。途中積雪による作業の中断をはさみ、12月27日に写真撮影、自然科学分析のための土壤サンプリングを行い、調査作業を終了した。実質稼動日数は、約7日である。

(3) 基本層序

厚さ約0.2mの水田耕作土下に、小礫・黄色小ブロックを含む厚さ約0.2mの暗灰褐色土が耕作土の床土として堆積する。その下に厚さ約0.3mの暗褐色を呈するややしまった層があり、そのさらに下に厚さ約0.25～0.3mの縄文土器を包含する黒色土層の堆積が調査区南東部に見え、黄色の地山上に至る。地山土は、約0.15mまでは褐色を帯びた黄色土を呈し、その下約0.2mは黄色土、さらに下は淡黄灰色となり深くなるにつれやや青みを帯びていく。

(4) 遺構

溝跡2条、ピット7基を検出した。

S D 0 1 (第4図、写真図版4) 調査区を南北方向に横切っている。幅0.5～0.7m深さ約0.15～0.25mを測る。断面形は、V字形を呈し、覆土は黒色土を基調とする。溝の覆土中から遺物の出土を見ることが出来ず、時期は不明である。

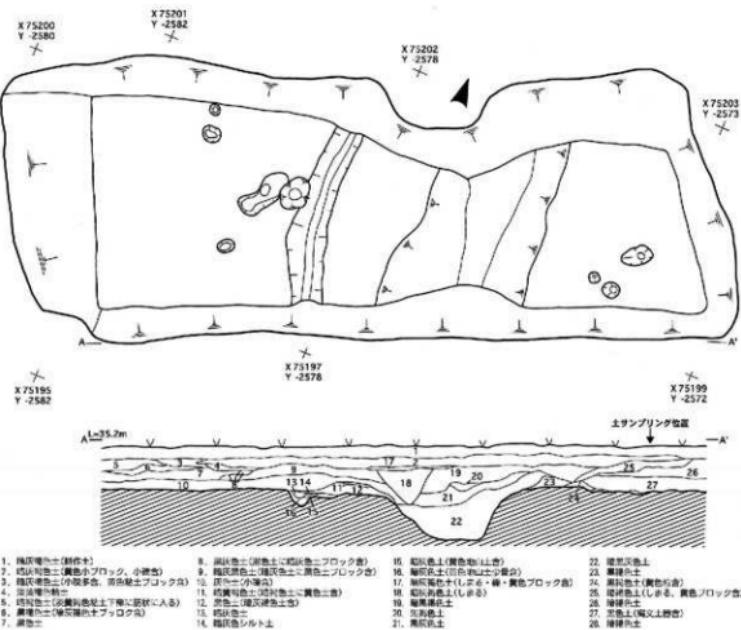
S D 0 2 (第4図、写真図版4) 幅2.0～2.5m、深さ約0.8mを測る。断面形はやや開くU字形を呈し、溝底がやや平坦になる箇所も見受けられる。水田床土下からの掘り込みを確認している。ほ場整備前までは水路として機能を果たしていたようである。

P (ピット) 調査区の西寄りに4基、東寄りに3基検出した。いずれの覆土中からも遺物の出土を見ることが出来ず、時期は不明である。

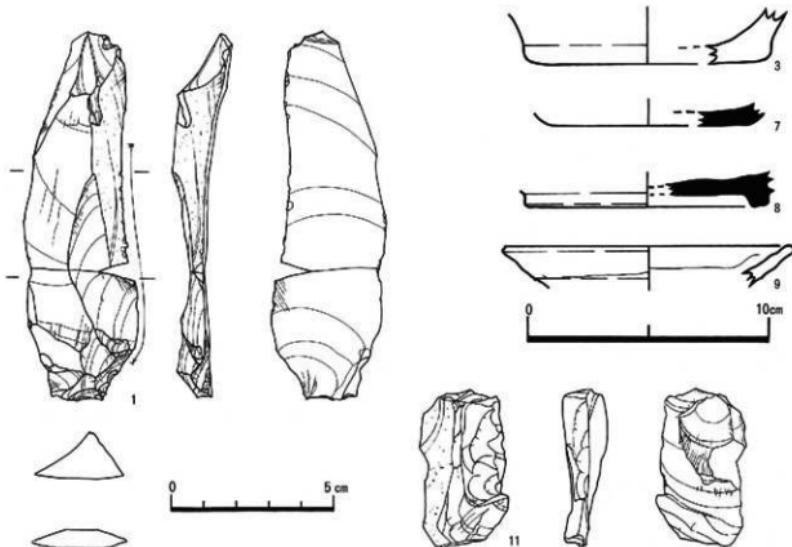
(5) 遺物

旧石器時代 (第5図、写真図版7) 1は濃飛流紋岩製のナイフ形石器である。剥片先端部の剥離は明瞭でないが、180度対面転移する石核より剥離された縦長剥片(石刀)を素材とする。打面除去を行った後、A面右側基部に微小な基部調整を行う。基部調整が微少であるため、典型的な東山型ナイフ形石器ではないようだ。稜部の摩滅が著しく、特に基部側で著しい。

縄文時代 (第5図、写真図版7) 包含層中や、SD 0 2 覆土中から縄文土器片が42点出土した。



第4図 境野新遺跡遺構図及び南壁土層断面図（1:80）



第5図 境野新遺跡出土遺物実測図（1.11は2/3、他は1/4）

口縁片1点、深鉢の底部片2点が出土している。2は縄文土器の浅鉢の口縁部である。眼鏡状隆帯文が観察され、晩期の下野式に属する。3・4は縄文土器の深鉢の底部である。5は石刃である。幅(短軸)約3.4cm、残存長軸長4.5cm、厚さ約1.8cmの長方形形状の礫を素材にする。打欠きが長軸側にあるが、一端を欠損している。6は砂岩製のすり石である。円形を呈し、磨かれた面がやや平坦になる。

奈良・平安時代(第5図、写真図版7) 7は須恵器の杯A(無台杯)である。底径8.2cmを測る。

8は須恵器の杯B(有台杯)である。底部径1.0cmを測る。内外面クロロ撫で調整を行う。

江戸時代(第5図、写真図版7) 9は越中瀬戸焼の鉄輪の丸皿である。10は伊万里焼の破片である。

時期不明遺物 11は多孔質凝灰岩製の削片である。12は安山岩製の削片である。13は桃種である。

(6) 小結

試掘確認調査時に黒色の遺物包含層中から旧石器時代のナイフ形石器が1点出土した。昭和47(1972)年の発掘調査時にナイフ形石器、搔器、彫器、石刃、削器、石核、削片が約40点出土している。いずれも古墳時代の住居跡内やその周辺で出土し、原位置から遊離している。

東北系の石器を主体とするが、中には僅ながら瀬戸内系の横長削片と石核がある。

射水丘陵と呉羽山丘陵周辺には旧石器時代の遺物を包藏する遺跡が点在する。既に指摘されているように、県西部の立野ヶ原台地では、単独で発見される遺跡や複数の石器組成を持つ遺跡がいずれも多く見られる。それに対し、射水丘陵と呉羽山丘陵周辺の出土地点は、石器や削片が単独あるいは多くて数点程度の発見に留まっている遺跡が多い。そういう中で、境野新遺跡はこれまでの調査で、石器組成にバラエティーを持つことが明らかになってきており、周辺遺跡とは異なった性格を備えているものと想定される。そこには、小規模ながらもこの地を生産活動の拠点的な場として利用していた人々の存在がうかがわれる。

2 向野池遺跡

(1) 発掘調査の経過と方法

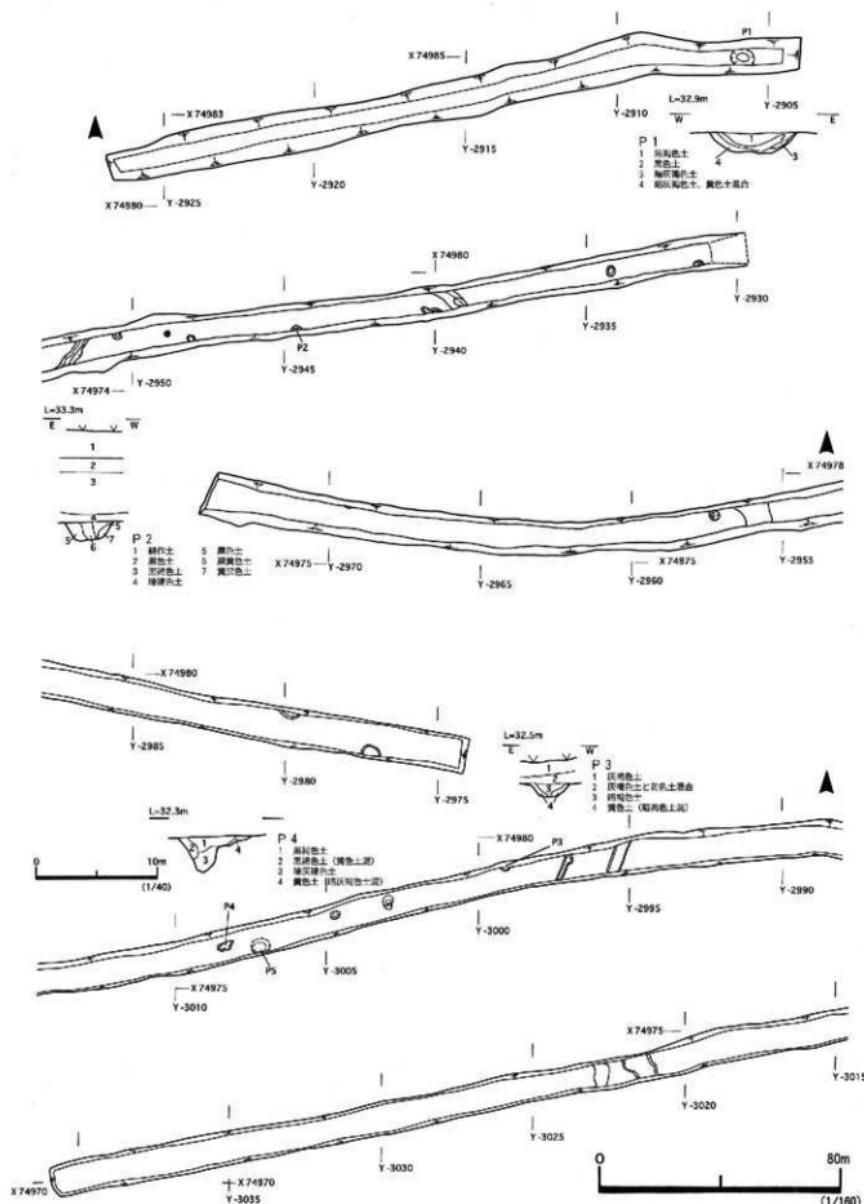
市道(TC側道)側溝工事にかかる総延長約170mの調査区を設定した。表土着手時に一部作付け箇所が存在し(B地区約55m)、その東側をA地区(約29m)、西側をC地区(約86m)と地区割りを行った。平成11年11月16日にバックホウによる表土掘削に着手した。まず西のC地区的表土掘削を行い、引き続きA地区の表土掘削を行った。B地区については、作物の収穫を待って、平成12年1月17日に表土掘削を行った。調査面積は合計約145m²である。

表土掘削に引き続き、作業員による包含層発掘・構造検出作業を着手した。検出した遺構を記録し、遺構掘削、上層断面実測、出土遺物実測、写真撮影などの記録作業を行い、出土遺物は番号を付けて取り上げた。遺構の図化・出土遺物実測に付いては、測量機器(トータルステーション)による平面図化作業を行った。途中降雪による作業中断をはさみ、平成12年1月28日に現地調査を終了した。実質稼動日数は約14日間である。

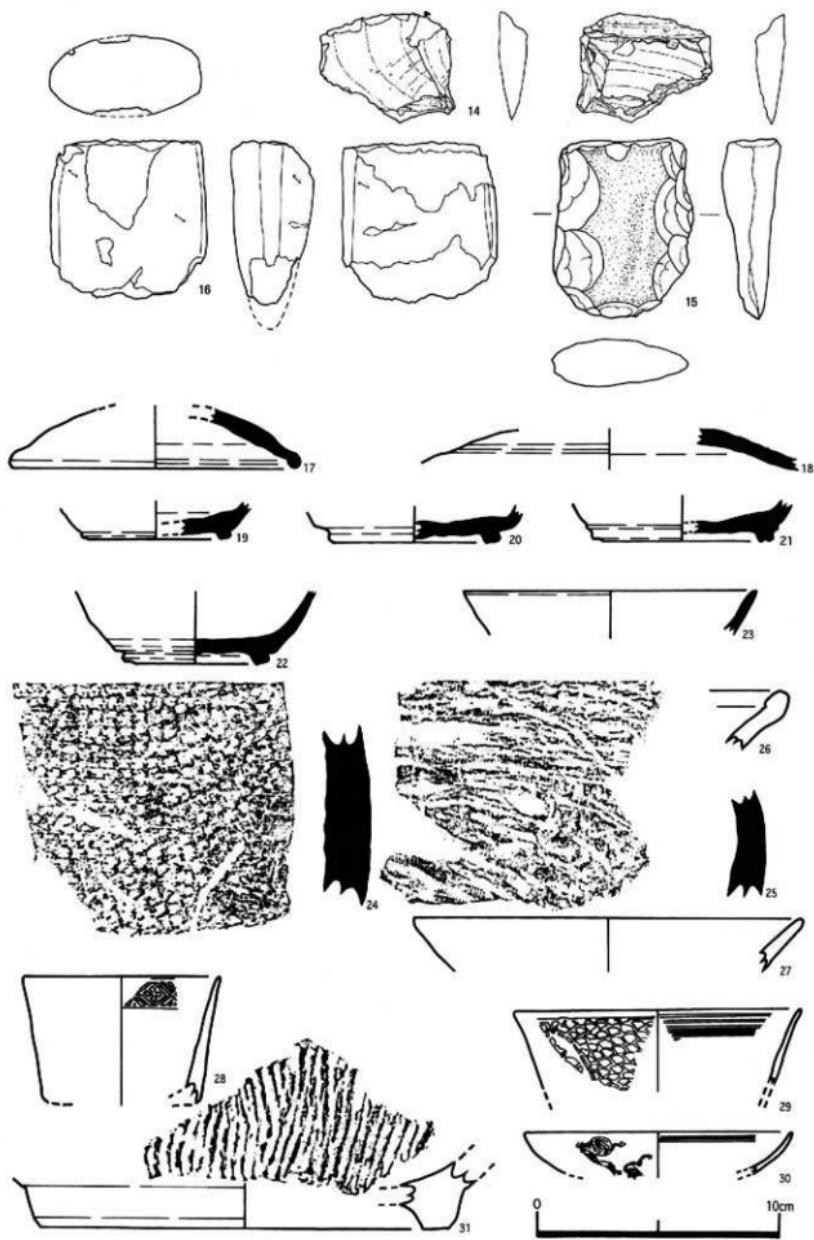
(2) 基本層序

A地区では、第1層褐色の水田耕作土(厚さ約0.2~0.4m)下に、第2層黄色土と褐色土の混合土層(厚さ約0.4m)が入り、第3層灰褐色土(厚さ約0.1~0.3m)、第4層黒灰色土、第5層黒色土、第6層灰黒色土、第7層黒色土で黄色土が混じる。第4層から第6層までは遺物包含層(厚さ約0.15~0.5m)で黄色地土に至る。第1層から第4層までは、後世の盛土であるが混入による遺物を包藏する。

B地区では、第1層の黒色耕作土(厚さ約0.2~0.3m)下に、第2層黒色土(下部に黄色土粒含む、厚さ0.1~0.2m)、第3層暗褐色(厚さ約0.2m)、第7層黒色土(遺物包含層、厚さ約0.2~0.4m)が見



第6図 向野池遺跡遺構図（1/160）及び土層断面図（1/40）



第7図 向野池遺跡出土遺物実測図 (14~31=1/2)

え、第8層として地山直上に褐色土（厚さ0.1m以下）が入る。

C地区では、第1層褐色水田耕作土（厚さ約0.15m）の下に、最大0.1mの第2層灰褐色と黄色土の混合する土が存在し、黄色地山土に至る。遺物包含層は耕作等の影響を受け、失われている。

第1層や、西に向うと薄くなる第2層中に若干遺物が含まれる。

（3） 遺構

A地区では、ピット状遺構1基を検出。B地区では溝跡1条（SD01）、ピット状遺構7基を検出。C地区では、溝跡3条、ピット状遺構6基を検出した。

P（ピット状遺構） 14基検出している。いずれも浅く、最も深いもの（P4）で約0.2mを測る。覆土は、暗灰色から暗褐色を基調とする。覆土中から遺物の出土を見ることができなかったため、時期は不明である。

SD（溝跡） いずれも調査区を南北に横切る溝で4条検出した。B地区のSD01は、幅0.3~0.4m深さ0.1m未満である。覆土は暗褐色土を基調とする。遺物の出土を見ることができなかった。C地区で検出した溝跡は、ほぼ表土直下に位置し、水田畦の方向とほぼ一致するため、耕作に伴う可能性が高い。

（4） 遺物

旧石器時代（第7図、写真図版7） 14は安山岩製の横長剥片である。瀬戸内系の剥片剥離技法によった、横長の剥片である。

縄文時代（第7図、写真図版7） 15は打製石斧である。16は磨製石斧である。

平安時代（第7図、写真図版7） 遺物包含層中から須恵器片が42点出土している。土師器片や鉄滓も数多く出土している。17・18は須恵器の杯蓋でいずれも内外面ロクロナデ調整で仕上げる。17の口縁端部は折れて丸くおさめる。19~22は杯B（有台杯）である。内面は全てロクロナデを行う。外表面はロクロナデで、21・22の底部にヘラ切り痕が見える。23は杯の口縁部である。口径12cmを測る。24は須恵器の壺の体部である。外縫目叩き痕、内面円形當て具痕が観察される。25は須恵器の壺の体部である。内外面ロクロナデが見える。26は上師器壺の口縁部である。外傾し端部を巻き込む。内側に段を持つ。

近世以降（第7図、写真図版7） 27~30は肥前系陶磁器である。31は擦り鉢である。

（5） 小結

狭長な調査区のため、溝やピットの性格は不明である。調査区の南縁部に位置するC地区では、遺物包含層が削平を受け、表土直下に地山面が検出された。B地区からA地区と東へ向うに従い包含層を確認し、その厚さが増す。一部盛土を伴う。

遺物は平安時代の須恵器を主体とし、土師器片も多く見られる。当該時期には、室住池窯や明神窯など射水丘陵東端に生産域が存在する。向野池跡は、射水丘陵の東に展開する境野新扇状地扇頂部に立地し、それら生産地からの消費地としての役割を担っていたものと想定される。

遺物包含層中からは、旧石器剥片、縄文時代石斧、近世陶磁器が出土している。旧石器時代の遺物として安山岩製の横長剥片が1点出土している。

また、後頁で取り上げるが、遺跡からは黒曜石製の細石刃核が採集され、中部高地系の細石刃文化が始めて県内で確認された。

附編 向野池遺跡採集の細石刃核

富山県埋蔵文化財センター 高橋 真実

1. 概要

本稿は、平成8年の分布調査で採集したもので、現在富山市で保管している黒曜石製の細石刃核の情況について報告するものである。この遺跡では、ナイフ形石器を主体とする石器群の存在が確認されている。なお、林寺ら(1992)は、この地点から南西に少し離れた所でナイフ形石器、石核、横長剝片なども採集し報告している。

2. 細石刃核の素材獲得技術と類型

今回報告する細石刃核の詳細について記述する前に、共通理解として細石刃核の素材獲得技術について触れておく。非削片系の細石刃核の分類について堤隆(1987)は、その石核素材獲得技法から2つの類型に分類する。1類とするものは、分割された蹠を整形剝離によって舟底形の石核原形を準備する。2類は、剝片、蹠などを石核素材として準備し調整する。これによって準備される素材は、多種多様に亘る。さらに数種に細分し検討する。砂田佳弘(1999)は、神奈川県吉岡遺跡B区の細石刃石器群の検討の中で、堤分類の2類に含まれる石器群の整形技法に複数方向の整形剝離が加えられるものが存在することを確認している。さらに、打面の調整剝離の有無によって時期差を設定できることを提示する。

以上の事を踏まえ、本遺跡で採集された細石刃核の保有する情報について整理し記載する。

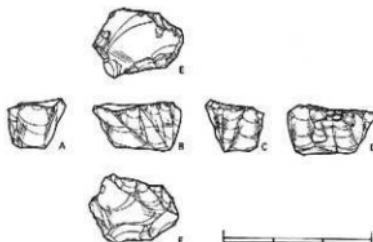
3. 細石刃核の情況(第8図)

この石核は、打面の幅が1.9cm×1.85cmを測り、ほぼ六角形を呈する。残存高は1.1cm、重量は2.15gを測り、高い透明感のある非常に良質な黒曜石を素材とする。

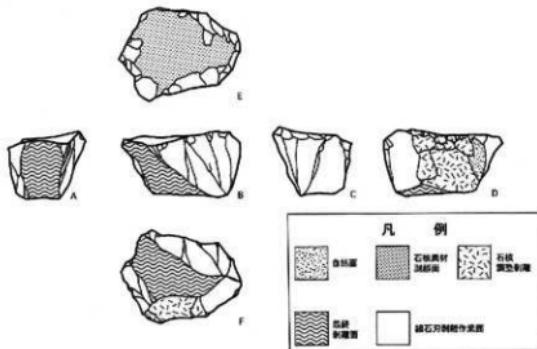
この石核の情況は、第8図に示したように周囲一円を連続した剝離によって、剝片剝離を施す。AからC面までの剝離痕が実際に細石刃剝離を行なった際のものと考えられ、細石刃自体の剝離枚数は、9枚を数える。最終的には、B面左側に観察される大きな剝離(剝離面1)により、遺棄されたと考える。D面に観察できる剝離は、細石刃を削出するための作業面の剝離とは異なり、細かな階段状の剝離が観察できることから、石核素材から細石刃核を整形するための調整剝離として理解できる。細石刃の剝離作業面と調整剝離で観察される剝離の方向は、すべて同一方向で打面の転移などは観察されない。打面となった上面部の情況は、石核から目的的剝片として剝離された際の主要剝離面の一部として観察できる。上面縁辺部に周囲から細かな調整剝離が観察できるものの積極的な調整剝離としがたい情況である。左側面には一部自然面が残されており、ズリのような素材を使用したことが窺える。

4. 切合関係から復元する最終剝離前の細石刃核

この細石刃核は、最終剝離でアーチ状末端部が発生したために遺棄されたと考えた。ここでは、この細石刃核の形態を非削片系、稜柱状の細石刃核として復元作業を行いながら論を進める。まず、基



第8図 細石刃核実測図



第9図 剥離面グループの分類

礎的な作業として最終剥離の影響の少ないC面を基本とし、左右の遺存する稜線を延長する。これによって推定される石核の高さは、約20mmである。中部高地付近で確認される細石刃核の平均的な残核の高さは、後述する柳又遺跡C地点では21.6mmと今回報告する細石刃核よりもやや大きいが、打面の面積等から遜色ないと考える。

次に切合い関係の少ない

部分から剥がされた細石刃の規格を検討したい。細石刃の規格がもともとよく分かる剥離面は、C面で観察される剥離面である。これを参考にすると細石刃の幅は、7mm程度の規格になる。同じく中部高地付近で確認される黒曜石製の細石刃の幅の平均などと比較しても大差ない。

5. 県内および付近における細石刃核の様相

麻柄一志（1999）等によると奥羽山丘陵及び県内各地域で該期の石器群を主体とする遺跡は、現時点では確認されていない。いくつか単独出土の遺物について数例知られるが詳細は不明である。従ってここでは、堤（1999）のいう“ゾーンW”に属する石器群、とりわけ西端部にある細石刃石器群を概観する。細石刃核のまとめた資料としては、岐阜県開拓地B遺跡（高根村1984）と長野県柳又遺跡A・C地点などがある。なかでも柳又遺跡C地点（谷口1991・中村1993）は、削片系細石刃核（玻璃質安山岩）のブロックと黒曜石製の細石刃核のブロックが層位的に分離して確認されており、新旧関係の捉えられる資料である。この黒曜石製細石刃核は2点知られるが、打面調整などが著しい頻度で加えられた細石刃核である。また、未報告ながら、庄川の上流域でも漆黒の黒曜石製細石刃核が確認されており、これらの石器群がほぼ同時期として位置付けられる。だが、編年的な位置付けについては橋本勝雄（1999）の指摘の通り地域編年の整備を軸に考えるべきであり、今後の検討課題としたい。

なお、県内では後続する石器群として小矢部市日ノ宮遺跡（上野他1976）A地区出土の削片系細石刃核がある。この石器については山本正敏（1992）の論考がすでに存在するが、今回改めて実見したため、その観察についても少し触れる。まず、石材であるが硬質頁岩を用いており、いわゆる湧別技法で削出される第1次削片を素材としている。甲板部分の傾斜などを調整するため、調整剝離を施し、打点などの位置関係から細石刃剥離自体は数枚行なわれるが、実用的な製品はないのではないかと考える。近年、稻田孝司（1996）は、岡山県恩原遺跡の細石刃石器群の評価で、「湧別技法をもつ細石刃文化の植民集団」と位置付け、東北地方から南下した集団が、恩原遺跡に到るまでのルートを論考している。川口潤（1991）も埼玉県白草遺跡の削片系細石刃核の評価を「移動した軌跡の1点を示す」資料としている。日ノ宮遺跡例もこのような情況の中で彼等の残した軌跡の一端として考え、数少ないながらも西日本で確認される単独出土の同様な細石刃核などとの関連も考慮する必要がある。

補注 アーチ状末端…角張淳一（1999）などによる。ここではウートケールバッセの同義語として使用。

参考文献

- 富山市教育委員会 1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』
- 西井龍儀 1976「呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号 富山考古学会
- 西井龍儀 1982「第1章旧石器時代」『富山市史 通史上巻』富山市
- 奥村吉信 1983「富山平野の旧石器時代遺跡の遺物集中地点—旧石器集団の動態復原をめざして(1)」『大境』第12号 富山考古学会
- 麻柄一志 1984「日本海沿岸地域における瀬戸内系石器群」『旧石器考古学』28 旧石器文化談話会
- 奥村吉信 1985「北陸の東山系石器群」『大境』第9号 富山考古学会
- 平口哲夫 1986「I 旧石器時代」『図説 発掘が語る日本史』第3巻 東海・北陸編 新人物往来社
- 松島吉信 1991「射水丘陵の旧石器時代遺跡研究の現状と課題」『大境』第13号 富山考古学会
- 林寺巖洲 1992「射水丘陵地域研究報告(I) 2. 向野池遺跡と金屋遺跡の旧石器」『大境』第14号
- 池野正男 1997「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究会』第6号 北陸古代土器研究会
- (附編)
- 稻田孝司 1996「第8章 恩原2遺跡発掘調査成果の総括」『恩原2遺跡』岡山大学文学部考古学研究室
- 角張淳一 1999「第3章 第3節整理の方法 1遺物の分類 旧石器時代の遺物」『東京都板橋区西台後藤田遺跡1999』
- 川口潤 1993「7調査のまとめ 3石器製作技術と移動の様態」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書129集 川本町白草遺跡1・北築場遺跡』
- 佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ 1993『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』
- 砂田佳弘 1999「第3章 B区 L1H層の石器群」『吉岡遺跡群』4
- 谷口康浩 1991「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『国学院雑誌』第92巻第2号(通巻1007号)
- 堤 隆 1987「柏原野台地の細石刃核」『大和市史研究』13号
- 堤 隆 1999「氷期の終末と細石刃文化の出現 小型石器にみる環境変動への適応」『科学』4月号(vol.68 No.4)
- 中村 大 1993「第5章 考察編—柳又遺跡C地点をとりまく諸問題 第1節細石刃に関する考察」『長野県木曾郡開田村柳又遺跡C地点』
- 麻柄一志 1999「北陸地方」『石器文化研究7 岩宿発掘50周年記念 日本旧石器時代研究50年と今後の展望』
- 高根村村史編纂委員会 1984『高根村史』
- 橋本勝雄 1999「細石器文化」『石器文化研究7 岩宿発掘50周年記念 日本旧石器時代研究50年と今後の展望』
- 林寺巖洲 1992「射水丘陵地域研究報告(I) 2. 向野池遺跡と金屋遺跡の旧石器」『大境』第14号
- 山本正敏 1992「小矢部市日ノ宮遺跡A地区出土舟形細石刃核」『埋文とやま』第40号

IV 境野新遺跡の自然科学的分析結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

境野新遺跡は、富山平野のほぼ中央部に分布する射水丘陵と呉羽山丘陵とにはさまれた開析扇状地である境野新扇状地の扇頂付近に位置する。発掘調査では、扇状地の表層に堆積する土層断面が作成され、色調や土層を構成する碎屑物の粒径による土層の質感などから分層が行われた。分層された土層中には、縄文時代の遺物包含層が確認された。

本報告では、分層された各土層の重鉱物組成および土層の堆積途上に降下堆積した可能性のある指標テフラ（降灰乍代の明らかな火山噴出物）を検出することにより、境野新遺跡における土層の層序対比を行う。

2. 試料

試料が採取された土層断面は、発掘調査所見により表土層とその直下の土層そしてその下位に順に25、26、27、28の各層が分層され、28層の下位にはシルト質粘土層である淡黄灰色土層が認められている。26層以上の土層は、やや粘土質の黒色の風成土壤いわゆる黒ボク土であり、27層は厚さ約30cmの黒褐色の腐殖質シルト層、28層はシルト質粘土層であり、上部の黄褐色土層と下部の黄色土層とに細分され、厚さはそれぞれ20cm程度である。縄文時代の遺物包含層は、27層に認められている。

試料は、27層中部から淡黄灰色土層の上部まで、厚さ約5cmで連続に試料番号1～14までが採取された。試料番号1～4は27層、試料番号4～8は28層上部、試料番号8～11は28層下部、試料番号12～14は淡黄灰色土層にそれぞれ相当する。

分析では、縄文時代遺物包含層の27層とその下位の28層上部については全点、28層下部以下では1点おきに試料番号9、11、13の各試料の合計10点を選択した。試料の採取された土層断面の柱状図と試料の採取層位を分析結果を示した図1に併記する。

3. 分析方法

前述のように重鉱物分析とテフラの検出をここでは行う。テフラの検出については、遺跡の地理的な位置と今回対象とする層位から、後述するK-Ahや懸陵隕石テフラ(U-Oki:町田ほか, 1981)など細粒の火山ガラスからなるテフラが検出されることが予想される。したがって、堆積物中の火山ガラスの産状を調べる火山ガラス比分析も行う。処理過程を以下に示す。

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析籠を用いて水洗し、粒径1/6mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物と軽鉱物分中に含まれた火山ガラスを偏光顕微鏡下にて同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものの「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒子は「不明」とした。また、火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡を持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および纖維束状のものとする。火山ガラス比分析は、軽鉱物分中における火山ガラスを計数するものである。

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

4. 結果

重鉱物組成は、10点の試料とともに斜方輝石と角閃石がほぼ同量で多く、少量の不透明鉱物を伴う組成である。詳細にみれば、27層中部の試料番号1、28層上部の試料番号5、淡黄灰色上部の試料番号13では、他の層位に比べて斜方輝石の量比がやや高く、27層下部の試料番号3では、角閃石の量比が特に多い。また、試料によっては微量の酸化角閃石、ジルコン、ザクロ石、緑レン石を含む。

火山ガラスは、27層下部の試料

試料番号	カンラン石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
1	120	2	105	1	1	1	0	15	3	250	27	1	1	221	250		
2	0	107	2	119	2	0	3	0	13	4	250	51	1	0	198	250	
3	0	89	1	146	2	0	1	0	4	7	250	28	1	1	220	250	
4	0	98	0	140	1	0	0	1	6	4	250	17	1	1	231	250	
5	0	111	1	120	0	0	3	0	9	6	250	10	1	1	238	250	
6	0	101	0	138	0	0	0	0	9	2	250	16	2	0	232	250	
7	0	103	1	133	3	0	2	1	7	0	250	5	0	0	245	250	
9	0	105	1	135	0	0	1	1	7	0	250	1	0	0	249	250	
11	0	99	0	142	1	0	0	0	8	0	250	2	0	1	247	250	
13	0	117	0	126	0	0	1	1	4	1	250	1	0	1	248	250	

番号1～3にやや不明瞭ではあるがバブル型火山ガラスの濃集が認められ、その下位の28層上部の試料にも少量～微量のバブル型火山ガラスが含まれる。28層下部以下には火山ガラスはほとんど含まれない。各試料に認められたバブル型火山ガラスは、無色透明のものが多いが、褐色を帯びたものも微量混在する。

各試料の分析結果は、表1と図1に示す。

5. 考察

境野新扇状地を構成する礫層は下段累層と呼ばれ、その地形面は低位段丘面に対比されている（富山県、1992）。同著によれば、低位段丘面を覆う土層中に始良Tn火山灰（AT：町田・新井、1976）が認められており、また段丘面上の泥炭層の放射性炭素年代（14C年代）として $21,000 \pm 700$ y.B.P.が得られている。これらのことから、低位段丘面は南関東でいう立川2面（Tc2）におおよそ対比されると考えられる。したがって、境野新扇状地の表層には、およそ2万5千年前以前の土層が堆積していることになる。

今回の分析では、27層下部にバブル型火山ガラスの濃集層準があることがわかった。このバブル型火山ガラスは、その中に褐色を帯びたものが混在することとその層位から、約6300年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井、1978）に由来するものであると考えられる。一般に土壌中に特定テフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多いといわれている（早津、1988）ことから、本地点におけるK-Ahの降灰層準は、試料番号3付近の27層最下部に推定される。28層上部に含まれる火山ガラスは、植物根や土壤中の動物の活動などで下層へ拡散したものであると考えられる。以上のことから、27層中部以上は約6300年前の縄文時代早期末以降に堆積した層であり、28層以下の土層はそれより以前の堆積層であるといえる。本結果は、境野新遺跡における縄文時代遺物の年代を推定する際の重要な指標になり得ると考える。なお、本報告と同時に分析を行った向野池遺跡では、11層とされた土層にK-Ahがテフラ層として明瞭に認識できる。

一方、各土層の重鉱物組成が上位から下位までほとんど変化のないことは、扇状地上の土層を構成

する碎屑物の由来に時期的な変化があまりないことを示唆する。境野新扇状地上では、砂礫層の堆積が終了した後期更新世以降には細粒の碎屑物がその表層に堆積し、それを母材として土壤層も形成されたと考えられる。その際の碎屑物の供給過程としては、扇状地上に残った小河川の氾濫と砂礫層の堆積途上にある新期扇状地表層からの風成塵および庄川、神通川、常願寺川などの大河川の河原などからの風成塵などが考えられる。おそらく過去における環境の変化により、碎屑物の供給量や碎屑物の供給量や上記各供給過程のバランスなどは変化したことが考えられる。しかし、いずれの供給過程でも碎屑物の由来は、平野の背後に広がる飛騨高地を構成する岩石である。したがって、供給過程が時期的に変化しても、供給元の地質に大きな変化がなければ、重鉱物組成の変化となっては現れない。今回の重鉱物分析結果は、そのことを示していると考えられる。ただし、今回の分析結果では、斜方輝石と角閃石との量比関係に若干の変化が読み取れることから、より時間幅を広げてみれば、層位的な重鉱物組成の変化を追うことができるかも知れない。その場合は、重鉱物組成による層序対比が可能になると考えられる。

なお、富山県(1992)の地質図で概観すると、今回認められた重鉱物のうち、斜方輝石は主に輝石安山岩からなる岩稜累層に由来し、角閃石は主に花崗岩類からなる飛騨新期深成岩類に由来すると考えられる。

引用文献

- 早津賢治(1988)テフラおよびテフラ性土壤の堆積機構とテフロクロノロジーATにまつわる議論に關係してー、考古学研究、34、p.18-32。
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰ー姶良Tn火山灰の発見とその意義ー、科学、46、p.339-347。
- 町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰、第四紀研究、17、p.143-163。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)日本海を渡ってきたテフラ、科学、51、p.562-569。
- 富山県(1992)1/10万 富山県地質図、内外地図株式会社。

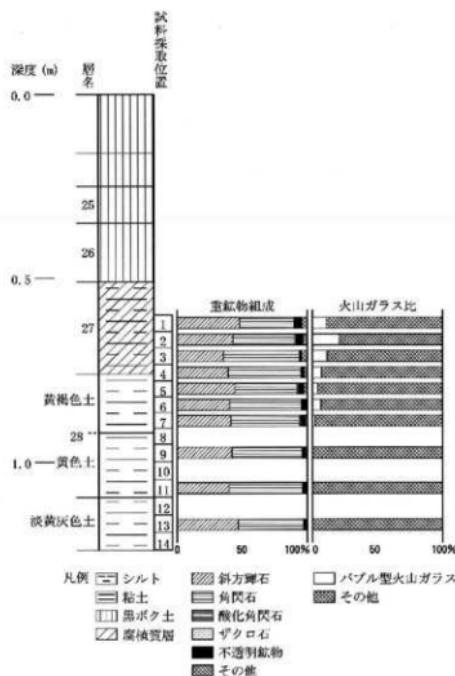
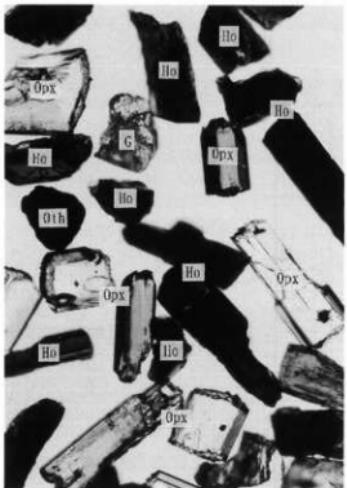


図1 試料採取土層断面の重鉱物組成および火山ガラス比



1. 重鉱物

(試料採取土層断面 27層: 2)



2. K-A h の火山ガラス

(試料採取土層断面 27層: 2)

opx:斜方輝石, Ho:角閃石, G:ザクロ石, Oth:その他.

0.5mm

V 向野池遺跡出土黒曜石産地推定結果

沼津高等専門学校 望月明彦

分析法 エネルギー分散蛍光X線分析

分析措置 セイコーインスツルメンツ社 S E A - 2110 L エネルギー分散型蛍光X線分析措置

産地推定法 1) 判別図法

2) 判別分析

分析試料 細石刃核 1点

推定結果 不明産地 (T Y X 1群)

現在知られている産地のいずれにも属しない。

R b 分率、S r 分率、Mn / Fe / K の指標からは魚津産黒曜石と似通っており、その近くに産地が存在するかもしれない。

(富山の産地不明ということで仮に T Y X 1群としておく)



航空写真（1：10,000 平成10年撮影、上が北）



米軍撮影航空写真（昭和21年）

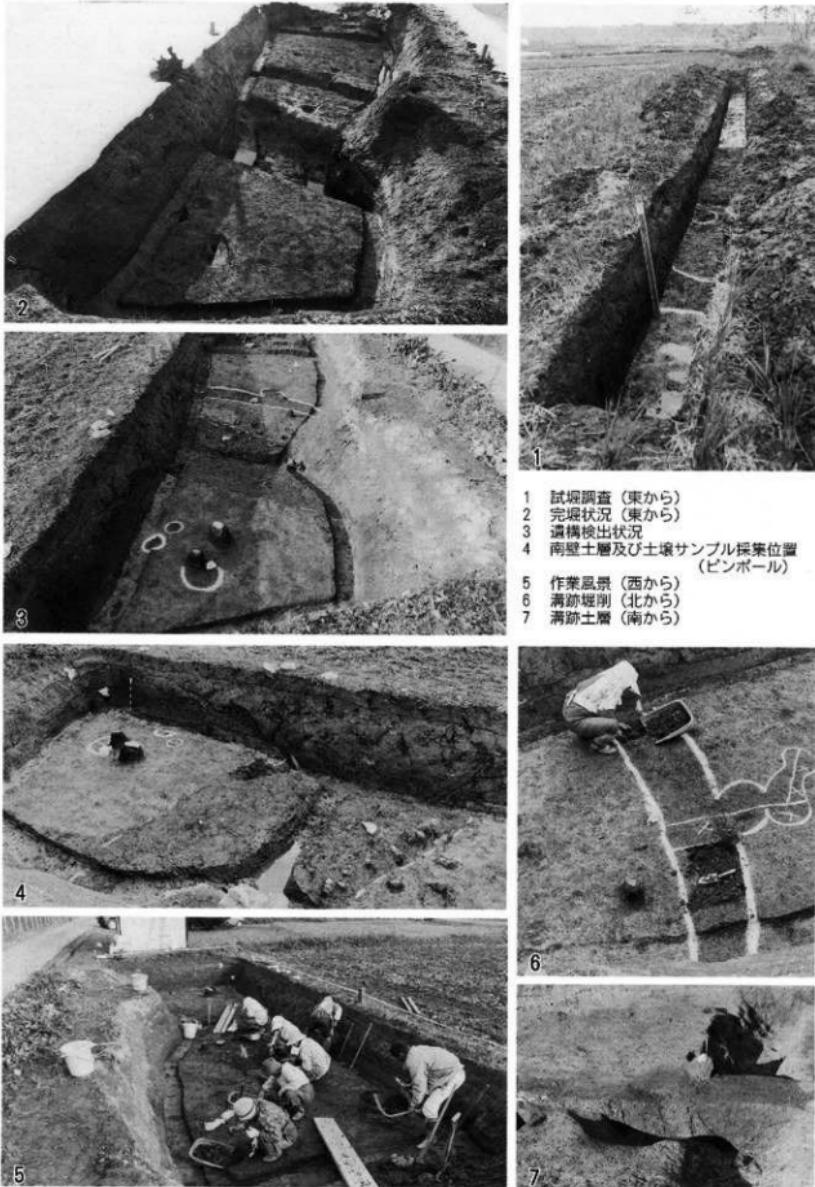


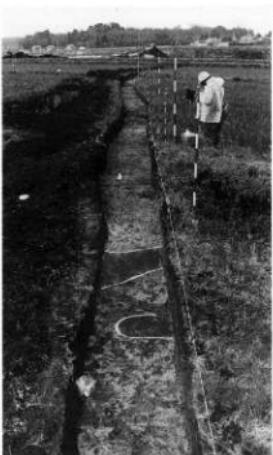
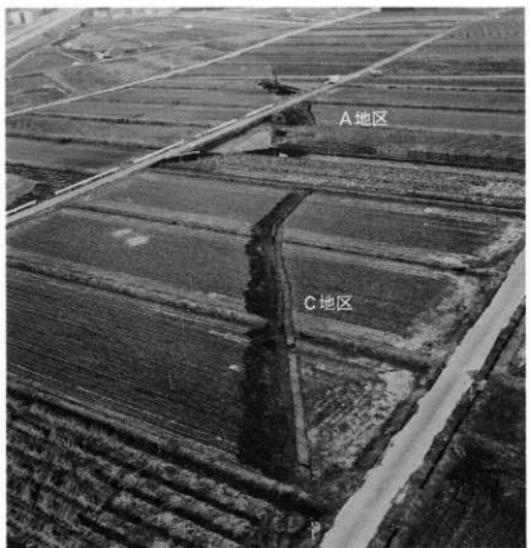
境野新遺跡及び向野池遺跡（西から）



境野新遺跡（平面表示は古墳時代の往居跡）

写真図版4（境野新遺跡）





C地区遺構検出状況

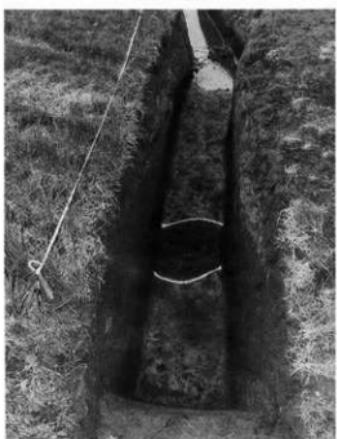
◀向野池遺跡西から



表土掘削



P4 土層(南から)



A地区 遺構検出状況



作業風景



B地区遺構検出状況（西から）



B地区南壁土層



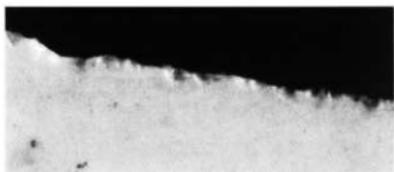
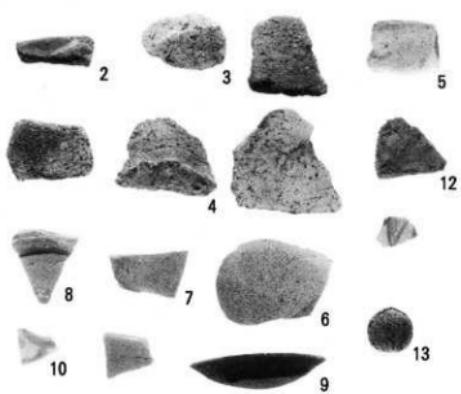
C地区P3土層（南から）



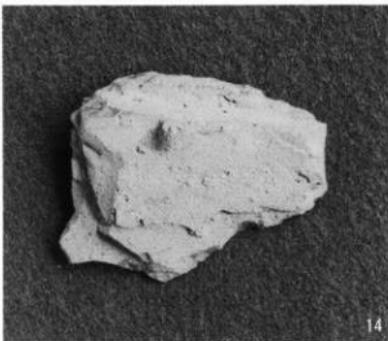
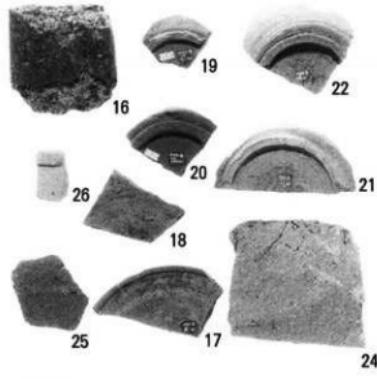
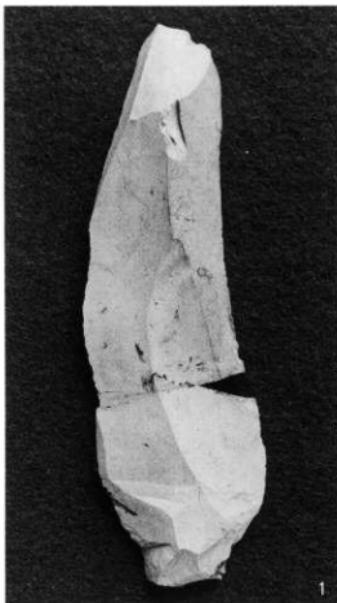
B地区遺構検出状況（東から）



B地区完掘状況（東から）



1 の拡大（光沢がみられる）
境野新遺跡出土の遺物



向野池遺跡出土の遺物

報告書抄録

書名	境野新遺跡・向野池遺跡
シリーズ名	(仮称) 富山西インターチェンジ関連埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(2)
編著者名	鹿島昌也 高橋真実
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0803 富山市富山市下新本町5番12号 TEL (076)442-4246
発行年月日	西暦 2000年 3月 31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
境野新遺跡	富山市境野新	16201	365	36度 40分 30秒	137度 08分 05秒	1999.11.15 ～1999.12.28	50	市道(I C側道) 拡幅工事
向野池遺跡	富山市境野新	16201	464	36度 40分 32秒	137度 07分 57秒	1999.11.16 ～2000.1.28	145	市道(I C側道) 新設工事
所収遺跡名 種別		主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
境野新遺跡	集落跡	旧石器、縄文 平安、近世	溝、穴	ナイフ形石器、剥片、縄文土器、石刃、すり石、須恵器、十師器、越中瀬戸焼、伊万里焼			約15,000年前の後期旧石器時代のナイフ形石器が出土。遺跡の主体は古墳時代。	
向野池遺跡	集落跡	旧石器、平安 近世	溝、穴	剥片、磨製石斧、打製石斧、須恵器、近世陶磁器			平安時代を主体とする集落跡。	

(仮称) 富山市西インターチェンジ関連埋蔵文化財
発掘調査報告書(2)

境野新遺跡・向野池遺跡

編集 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
富山市下新本町5番12号
発行 富山市教育委員会
富山市新桜町7番38号
印刷 製本富山フォーム印刷
発行日 平成12(2000)年3月31日

